

～「R3JAなのはな米品質向上運動」実施中～
なのはな米1等比率95%以上を継続！！

R4年産なのはな米の高品質・安定生産にむけた土づくり！

なのはな農協管内では、土壌分析の結果、全体的にケイ酸とカリ、また地域によっては腐食が不足しています。
また、近年ごま葉枯病(写真)の発生が増加しています。
土づくりは一朝一夕には出来ません。ケイ酸質資材を中心に継続的に施用し、地力を高めましょう。

1 土づくり

～土づくりの3つの要：①土壌改良資材の施用、②有機物の施用、③深耕の実施と排水性の改善～

①土壌改良(土づくり)資材の施用

(1) ケイ酸質資材の継続的施用

ケイ酸質資材の施用を中断するとケイ酸含量が急激に低下します。土壌改良資材の継続的な施用に取り組みましょう(表1)。

ケイ酸による米の品質向上効果

- ①稲体のケイ酸濃度を高めることで、稲体の姿勢がよくなり、光合成能力を高く保ち、登熟や品質が向上します。
- ②割粳が減り、斑点米を軽減します。
- ③茎葉や根が強くなり倒伏を軽減します。
- ④病害虫に対する抵抗力が向上します。



写真 ごま葉枯病の病斑

表1 土壌改良資材の施用の目安

資材名	主成分		施肥量 (10a 当たり)
珪酸石灰(砂、粒)	ケイ酸	31%(砂) 30%(粒)	200kg
	アルカリ分	48%(砂) 45%(粒)	
シリカロマン	ケイ酸 アルカリ分 鉄	25% 45% 5%	100kg
シンキョーライトP	ケイ酸	66.1%	60kg
スーパーけいさん鉄	ケイ酸 アルカリ分 苦土 鉄	23% 40% 5% 15%	100kg
新アサヒニューテツ	ケイ酸 アルカリ分 苦土 鉄	20% 30% 3.5% 16.8%	100～ 150kg

ごま葉枯病は、ケイ酸、カリ、鉄分などが不足し、地力が低下すると発生が増加します。
多発したほ場では鉄分を含む土壌改良資材を施用しましょう。

②有機物の施用

- (1) 土壌の腐植を増やし保肥力を高めるには、有機物の補給が有効です(表2)。また、堆肥や発酵鶏糞にはカリ等の養分が含まれるので、これら有機物の施用や地力増進作物の作付けを積極的に進めましょう。
- (2) 水稻収穫後、なるべく早い時期に稲わらをすき込み、腐熟を進めましょう。

表2 堆肥の施用の目安

堆肥種類	施肥量 (10a 当たり)
牛ふん堆肥	1～2t
豚ふん堆肥	1～2t
発酵鶏糞	100～150kg

③深耕の実施と排水性の改善

- (1) 秋耕と春耕の2回起こしで、現状+3cmの深耕をしましょう。
- (2) 秋耕後の排水溝の設置や、心土破碎により水はけをよくしましょう。

2 秋の雑草対策

～次年度の雑草対策は、収穫直後から！！～

(1) 本田の雑草管理(稲刈取後、できるだけ気温が高いうちに対応しましょう！)

除草剤名	散布量(10a 当たり)	備考
石灰窒素	40～50 kg	発芽促進により秋の内に発生したヒエをすき込み、次年度の発生密度を減らします。
ブリグロックスL	800～1000 mℓ (希釈水量 100～150ℓ)	1年生雑草(ヒエ、クサネム、アメリカセンダングサ等)発生密度を減らします。
ラウンドアップ マックスロード	1年生雑草:200～500 mℓ 多年生雑草:500～1000 mℓ (希釈水量 50～100ℓ)	塊茎を形成する雑草(クログワイ等)にも浸透移行し、密度を抑えます。



(2) 畦畔の雑草管理

除草剤名	散布量(10a 当たり)	備考
カソロン粒剤 6.7	雑草発生前～ 発生始期 4～6 kg	秋冬期～春期に、畦畔に散布することにより、6月頃までイネ科雑草の発生を抑えます。カメムシの餌をなくし、カメムシの越冬世代と次世代以降の発生密度を低減します。※大麦等畑作物作付ほ場には使用できません。

秋の農作業安全運動実施中(10月20日まで)